童話に映し出される道徳観について

—グリム童話「ヘンゼルとグレーテル」の場合—

浜　野　兼　一

はじめに

童話には、その作品が生まれた国や地域の人々のならわしや伝統、時代背景などが組み込まれていることが少なくない。作品が書かれた時代にもよるが、いわゆる古典童話と称されるものには、この傾向がうかがえる。

本稿で取り上げる、グリム童話「ヘンゼルとグレーテル」も、古典童話のひとつとして知られている作品であり、そのストーリーは、時代背景や社会状況などを盛り込んで内容が組み立てられている。非現実的な空想と創造に現実世界が同居しているのが作品の特徴であり、みどころでもある。

ところで、「子ども向けのお話し」という点から童話の作品としての性質を考えると、作品に触れた子どもの情操や知性を豊かにするだけでなく、社会性や道徳性の涵養といった面にも影響を及ぼすものといえる。こうした前提から、ここでは「ヘンゼルとグレーテル」のストーリー、各場面、登場人物などに浮かび上がる道徳観について検討する。

1　ストーリー展開からみた家族の人間関係　～父親と母親～

本節では、ヘンゼルとグレーテルのストーリーの展開を辿り、各場面にみられる諸状況を家族の人間関係という点から検討する。

はじめに、各場面の内容を考察するためのアプローチとして、ストーリーのあらすじを確認しておくことにする。

ヘンゼルとグレーテルは、貧しい木こりの家で育った兄と妹である。木こりとして子どもたちを養っていた父親だったが、家族４人が食べていけるだけの糧をえることが困難となった。このような状況のなかで、母親の強い提案を受け入れ、ついには子どもたちを森に棄ててしまう。一度は家に戻ることができた子どもたちであったが、２回目の際は戻ることができず森をさまよい歩くことになってしまつた。こうした危機的状況のなか、子どもたちは森の奥にお菓子でできた家を見つける。

そこには魔女が住んでおり、二人は囚われの身となるが、魔女に食べられそうになったヘンゼルをグレーテルが救うことになる。このとき、グレーテルは魔女を焼き殺すという手段で難を逃れた。結局二人は、魔女の家から持ち出したものを手に、親のもとへ帰るのである[1]。

一見すると、自己中心的で非情な親の「子棄て」という解釈になるが、「子棄て」という状況に追い込まれるまでは、多くの葛藤があったと思われる。家族の人間関係としては、子どもたちと両親のあいだには親と子の心理的つながりがあったと推測できる(「子棄て」に至る以前までであるが)。これは、両親、子どものいずれの側からも言えることである。

さて、ストーリーの各場面を見ながら、親の動きと家族の人間関係の展開をみると、目がとまるのは父親の言動である。父親は、ほぼ一貫して親としての子どもへの思いを持ち続けている。いくつかの場面で父親がみせた言動は、それを裏付けるものといえよう。これは、父親としての子どもへの愛情の表現でもあるが、同時に母親をも含んだ家族愛とも言えるものである。しかし、父親のその「思い」は、実際の行動(子どもを救う)となって表には出てこなかった。ストーリーの展開を左右するような場面において、妻の言うがまま、自分の思いに反する行動に身を委ねる父親の姿が映し出されている。こうして、家族愛という道徳的側面は母親によって打ち砕かれる。

そうなると、母親は完全に悪者ということになるのだろうか。実は、子どもたちを棄てることを提案した母親でさえ、親と子の心理的つながりを思わせるような言動を示している。根本的なところでは、子どもたちに対する憎悪は感じられないともいえる。なぜなら、その気になればその場で子どもたちを葬ることもできる場面がいくつかあるにもかかわらず、そのような行動はとらないからである。しかしながら、最終的には「子棄て」を断行するのであるから、母親は悪者であり家族の人間関係を壊しても自分の生活は維持する、というところに帰着する。

2　ストーリー展開からみた家族の人間関係　～ヘンゼルとグレーテル～

父親と母親の行動が家族愛よりも自らの生活維持に向かうなかで、ヘンゼルとグレーテルの場合はどうなのであろうか。

ヘンゼルとグレーテルの場合は、より鮮明に親と子の心理的つながりを見いだすことができる。なぜなら、自分たちがこれから棄てられようとしているのに、それ(子棄て)を実行しようとしている張本人(両親)のもとに戻ろうとする策略を練るからで

ある。子どもたちは、なぜこのような行動をとろうとしたのであろうか。

この理由としては、第一に、親と子が生活を共にしてきたなかで育まれてきた情愛的絆の形成が挙げられる。その生活が、たとえどのように苦しくても、子と親がともに生活することで愛着(アタッチメント)がかたちづくられてきた、と考えられる。第二に、子どもたち自身には日々生きていくための糧を得る手段がなかったということが挙げられる。つまり、生きていくために両親に依拠する、というかたちで「心理的つながり」が保たれていたとも考えられるのである。

しかし、両親がヘンゼルとグレーテルを棄てるという決断をしたこと、その事実を２人が知った瞬間から、それまでに築きあげられてきた「心理的つながり」は、音を立てて崩れはじめたといえよう。

ここで疑問として提起されるのは、「ストーリーの最後の場面で、なぜヘンゼルとグレーテルが再び自分の家に戻ろうとするのだろうか」という点である。

この疑問に対しては、「一歩大人に近づいた(自立した)姿を親にみせるために家に戻る」、または「今回はうまくいったが、まだまだ自立が不十分だから親を捨てきれずに家に戻る」の二つが考えられるであろう。

3　各場面の検討

次に、ストーリー展開における道徳観を検討する前提として、５つの主要場面に着目し、各場面の内容を分析する。

場面①「あしたの朝、子どもたちを連れだして、森の奥まで行き、…子どもたちをそのまま森の中に置いてくるんだ」

この場面は、ストーリー全体を方向づけるところである。一般的なとらえ方としては、親には子どもを育てる責任があるのだから、生活苦を理由に子どもを棄てることは許し難い、となる。このことから、子棄てを画策した両親(特に母親)が悪いという理解になるであろう。

場面②「とうとう家を出てから、三日目の朝になりました。２人は、それでも歩きだしましたが、先に行くほど森は、深くなってきました」

この場面では、ヘンゼルとグレーテルが親から棄てられたことを実感することになる。２人の目線からみると、自分たちがどこへ向かえばいいのかすらわからない状態に追い込まれた場面でもある。第三者的には、子どもたちは親から棄てられて気の毒、可哀そう、であろうか。

場面③「2人はその鳥の行くほうへついて行きました。すると、お菓子でできたお家の前にたどりついたのです」

ここでは、ヘンゼルとグレーテルが逆境に追い込まれた状況で、どこからか鳥が登場し、その鳥の案内でお菓子の家をみつける。そして、2人だけで、お菓子の家という未知の場所に入ってゆくのである。

場面④「グレーテルは魔女の後ろからどんと突くと、そのはずみで、魔女は、かまどの中へ転げ落ちました」

肉親を救うために魔女に立ち向かうグレーテルがクローズアップされる。グレーテルが魔女を殺害するというショッキングな場面が出てくる。殺害という行為は、道徳的には許容されるものではないが、魔女は悪人だから殺してもいい、悪人が住んでいた家だからそこにあるものを勝手に持ち出してもいい、という正義感が浮かび上がっている。

場面⑤「そしてついに、自分たちのお家を見つけました。…グレーテルは、魔女の家から真珠や宝石を持ち帰っていました」

他人のものを許可なしに持ち帰るという行為は、非道徳的であるが、魔女(悪者)を退治したという正義感によって、その非道徳性は打ち消されている。

おわりに

以上、各節の検討を踏まえると、ストーリー全体を通して、ヨーロッパの現実世界と童話ならではの世界が展開されるなかで、ヘンゼルとグレーテルを中心とした人物の動き、家族の人間関係に道徳的視点をうかがい知ることができたといえよう。
また、第3節で分析した主要場面については、「場面」と「道徳観」それぞれのキーワードが表1のように整理できるであろう。

表1

場面	場面のキーワード	道徳観のキーワード
①	育児放棄、自己の生活維持、家族崩壊	家族愛、兄妹愛、生命、自然
②	恐怖・孤独との戦い、生きる糧	兄妹愛、生命、自然
③	未知の世界、魔女との出会い	役割責任、兄妹愛、動物愛、他者理解
④	魔女との対決、身内の救済	兄妹愛、権利、自立
⑤	家族との再会	成長、家族愛、絆、動物愛

上記のキーワードは、童話と道徳観に関する今後の研究テーマを考えるにあたっての手がかりとしたい。

注釈

1．『世界おとぎ文庫(グリム篇)森の小人』小峰書店 1949年２月。